

『新源氏物語』の挑戦：和歌の扱いをめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中, 周子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4673

『新源氏物語』の挑戦

—和歌の扱いをめぐる—

中 周 子

一、はじめに

昭和四十九年十一月八日号「週刊朝日」誌上に田辺聖子による『新源氏物語』の連載が開始された。物語は次の一文で始まる。⁽¹⁾

光源氏、光源氏と、世上の人々はことごとしいあだ名をつけ、浮わつた色ごのみの公達、ともてはやすのを、当の源氏自身はあじけないことに思っている。

彼は真実のところ、まめやかでまじめな心持の青年である。

「いづれの御時にかありけむ、女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらねどすぐれてときめき給ふありけり」という有名な原典の冒頭とは、まったく異なる書き出しで始められている。現在でこそ、『源氏物語』を大胆に翻案、加工した小説や漫画などが輩出しているが、『新源氏物語』発表当時は、

まだ与謝野晶子、谷崎潤一郎、田地主子等の現代語訳が主流であった。そのような當時を思えば、これは画期的な書き出しであった。しかも、『新源氏物語』の第一回目は「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」と題されている。原典では空蟬巻の前にある桐壺と帚木の両巻を、省いているのである。しかも、空蟬の巻から始めてはいるが、『新源氏物語』冒頭は原典の空蟬巻の冒頭部分を翻案したものでもない。原典の空蟬巻は、次の光源氏の台詞で始まる。

寝られたまはぬままには、「われは、かくひとに憎まれてもならはぬを、今宵なむ、はじめて憂しと世を思ひ知りぬれば、はづかしくて、ながらふまじくこそ、思いなりぬれ」などのたまへば、涙をさへこぼして臥したり。

これは、帚木巻における出来事、人妻と知りつつ強引に関係を持った空蟬が、二度とあやまちを繰り返すまいとして源氏を寄せ付けな

いことを、空蟬の弟小君にむかって嘆く光源氏の台詞である。「眠られぬ夏の夜の空蟬の巻」ではあるが、原典の空蟬巻の冒頭部分を用いてはいないのである。

『新源氏物語』の冒頭に類似する文章は、次の『源氏物語』帚木巻の冒頭に見当たる。

光源氏、名のみことことしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすぎごとどもを、末の世にも聞き伝へて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひけるかくろへごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひさがなさよ、さるは、いといたく世を憚り、まめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には笑はれたまひけむかし。

帚木巻冒頭では、光源氏が、輝かしい呼び名に反して、女性関係のよくない噂があり、しかも知られていない浮気沙汰も多いと匂わせている。第二巻目の書き出しであるのに突然に主人公を説明することは唐突であり、しかも桐壺巻に描かれた藤壺をひたすら慕っている光源氏のイメージと合わないのである。『源氏物語』の帚木巻が、首巻を前提としないことについては、つとに「帚木が書かれた時に桐壺の巻がまだ存在しなかった」可能性が指摘されて以来、「源氏物語成立の順序」が問題になってきた。『新源氏物語』の冒頭が、帚木巻の書き出しを用いていることは、現行の『源氏物語』成立以前に存在した「源氏の物語」の冒頭部分を踏襲するものと意味

付けできよう。

さらに、『新源氏物語』は冒頭から、物語の主人公、光源氏のイメージを明確に提示している。光源氏は、女たちによる喧しい噂「浮わついた色ごのみ」とは異なる誠実な青年として物語に登場するのである。田辺聖子の言にも原典は「主人公の顔が見えない」「そういうところに『新源氏』は挑戦した」とある。

このように、その冒頭だけを見ても、『新源氏物語』は従来の作家たちによる『源氏物語』の現代語訳とは異なる作品を志向する、田辺聖子の「挑戦」であったことが看取できるのである。

これまでも、『源氏物語』の口語訳・翻案史上における『新源氏物語』の新鮮さについては、田辺聖子自らが、創作上の工夫について、エッセイの中や度々の対談で語っている^①。また、数多くの研究も行われてきた。しかし、『新源氏物語』が単なる現代語訳ではない点が強調され、原典にない部分が注目されるあまり、かえって原典をいかに咀嚼し昇華し得たかについての説明が、未だ十分に行われているとはいえない。ことに、本稿で取り上げたいのは、和歌の扱い方である。和歌は意識されて会話や心中描写に書き換えられている場合が多いのであるが、原文通りに引用される場合もある。この違いにはどのような意図が働いているのか。本稿は、『新源氏物語』における和歌に注目して考察することにより、『新源氏物語』の原典への「挑戦」の具体相を明らかにしたい。

二、「新源氏物語」における和歌

『源氏物語』は約七九五首の和歌を含んでいる。それらの和歌は、散文と相まって登場人物の描写や心情表白、情景描写やストーリーの展開において重要な役割を担っていることはよく知られている。和歌なくして『源氏物語』は成り立たない、とは古典研究者の共通認識であろう。そして、作家たちの現代語訳においても、和歌のみはそのままに残された。与

謝野晶子訳では和歌のみが置かれ、谷崎潤一郎訳、円地文子訳では、和歌とともに口語訳が注記された。

しかし、『新源氏物語』では、原典の和歌が省略されたり、あるいは会話や心内語に書き直されたりしているのである。『新源氏物語』以後においても、瀬戸内寂聴訳では和歌と口語訳を五行詩にしたものとを並置している。これは、円地文子に至る現代語訳の流れを汲むものであり当然といえよう。しかし、リライト本とされる橋本治『薫変源氏物語』においても、語句の書き換えが行われているが、和歌はすべて残されている。現代語の文脈中に、和歌のみを古語のままに置くことが、当然のように行われているのである。

そのような現代作家たちの傾向と比べてみると、『新源氏物語』が原典の和歌を大胆に会話に置き換えてしまったことの意義は大きい。原典の和歌をいかに取捨選択したか、どのように活かし、また変更したかは興味深い問題である。

まず、『源氏物語』各巻所収の和歌が『新源氏物語』ではどの程度、和歌の形で残されているのかを巻ごとに一覧してみよう。原典の巻名と、その巻の歌数、下段の数字が『新源氏物語』の歌数(和

桐壺	9	0	帚木	14	0	空蟬	2	1	夕顔	19	2	若紫	25	5
末摘花	14	7	紅葉賀	17	4	花宴	8	0	葵	24	8	賢木	33	6
花散里	4	4	須磨	48	11	明石	30	1	濤標	17	2	蓬生	6	1
関屋	3	1	絵合	9	4	松風	16	3	薄雲	10	1	朝顔	13	2
少女	16	6	玉鬘	14	7	初音	6	4	胡蝶	14	3	螢	8	2
常夏	4	2	篝火	2	0	行幸	9	2	藤袴	8	0	真木柱	21	3
梅枝	11	1	藤裏葉	20	8	若菜上	24	9	若菜下	18	1	柏木	11	2
横笛	8	4	鈴虫	6	0	夕霧	26	2	御法	12	0	幻	26	2
匂宮	1	1	紅梅	4	2	竹河	24	4	橋姫	13	4	椎本	21	9
総角	31	4	早蕨	15	2	宿木	24	8	東屋	11	7	浮舟	22	14
蜻蛉	11	3	手習	28	13	夢浮橋	1	1						

歌一首の形で用いられた数)である。

このように一覽してみると、さまざまな傾向が看取できる。

『新源氏物語』においては、原典の和歌七九五首の約四分の三が削除されたり、あるいは会話に書き直されていることがわかる。『新源氏物語』に残された和歌は一九三首、原典の和歌の二四パーセントに過ぎない。なかでも、桐壺、帚木はやむないとしても、花宴、篝火、藤袴、鈴虫、御法の巻では、一首も和歌が用いられていない。また、幻巻は紫の上の死後、各季節折々の各月にわたって、紫の上の思い出に浸って光源氏が詠じた哀傷歌を集めた感のある巻であるが、それらの和歌を『新源氏物語』では、わずかに二首しか用いていないのである。一方で、花散里巻の四首の和歌はすべて引用されているのである。

では、和歌をそのまま残すことと、会話や散文に書き換えることは、どのような意図のもとに区別されているのだろうか。従来、注目されることが多かった会話化された和歌のみならず、原文のままて用いられた和歌にも注目したい。

三、和歌を原文通りに用いる場合

『新源氏物語』において和歌を原文のままに用いている場合にも、相応な工夫の跡が見られる。

例えば、原典の若紫巻の半ばに、北山で母に死別し祖母の尼に育

てられている少女を垣間見た後に、藤壺のゆかりと知って、どうしても引き取りたくなる気持ちを詠じた光源氏の独詠歌がある。

秋の夕べは、まして、心のいとまなくおぼし乱るる人の御あたり
に心をかけて、あながちなるゆかりも尋ねまほしき心もまさり
たまふなるべし。「消えむ空なき」とありし夕おぼし出でられて、
恋しくも、また、見ば劣りやせむと、さすがにあやふし。

手に摘みていつしかも見む紫の根に通ひける野辺の若草

物語は、この歌を境に「十月に朱雀院の行幸あるべし」と話題を変え、光源氏の心情を凝縮した和歌によって、北山の少女の話といったん締めくくるのである。

この和歌は書かれたものとも、口ずさまれたものとも、あるいは、心中の思いが和歌になったとも、書かれてはいない。それほど物語中の和歌は文脈の中に融合している。

円地訳までの現代語訳においては、現代語の文中に古語の和歌が混在することが普通に行われてきた。しかし、現代語の中に和歌が置かれることに違和感はないであろうか。この場面の円地訳を見ておこう。

秋の夕暮れは、ひとしお物思いのいや増す頃なので、恋いこがれていらっしやる藤壺の御あたりにばかり心は行き通って、まだ男女の間としてはふさわしくないあの幼い姫にしても、かの宮の

由縁の方と思えば、たつて尋ね求めたいお心も、前よりいっそう増さることになるのであろう。「消えむ空なき」と尼君がああ姫のことを不安そうに詠まれた、北山の春のことなどお思い出されて懐かしくもあり、また、手元に置いてみたら、見劣りすることもあるかと、さすがに危ぶまれもなさるのであった。

手に摘みていっしょにも見むむらさきの根にかよひける野辺の若草

最後の光源氏の和歌は、文脈上、唐突ではないだろうか。瀬戸内訳では、歌の後に「と、お詠みになります」と加筆されているが、やはり不自然さは拭うべくもない。

『新源氏物語』でも「手に摘みて」の和歌は散文文化されず、原文のまま用いられている。しかし、この場面は省かれ、この歌はさらに若紫との交流が進んだ後の場面に置かれるのである。

若紫の祖母の尼君の死後、ある冬の嵐の夜に、源氏は北山の若紫を見舞い「宿直人」として共に夜を過ごす。帰宅して後も「愛らしい姫君の姿が目にもちらついて忘れられない」源氏は、若紫にはじめて手紙を贈ろうとするが、「後朝の文」めいて気がひける、という場面に、「手に摘みて」の和歌が用いられている。

…さすがの源氏も筆をとったまま、按じていた。

思い屈しつ、いたずら書きに、手もとの紙に書き付けてみる。

〈手に摘みていっしょにも見むむらさきの根にかよひける野辺の

若草〉

はやくこの手に摘みたい。藤壺のゆかりに繋がるあのわかわかしい姫を。

あの幼いひとを、誰の手にも渡したくない、という思いが源氏の胸に熱く燃える。そうだ、藤壺の宮に通わせて、あの姫を「紫の君」と呼ぼう。

「手に摘みて」の和歌を「手もとの紙に書き付け」た手紙の下書きとしている。和歌を書き言葉として、具体的に手紙を書く行為をとまなうものとして示すことで、現代語に古語が混在することの不自然さを緩和しているのである。この例に限らず『新源氏物語』では、多くの和歌は手紙に書かれるものとされる。そして、歌意も注記としてではなく、歌を詠む源氏の思いを描く文中に、文脈を裁断することのないように工夫されて置かれている。

和歌を原文通りに残す場合においても、『新源氏物語』では、原典のままの位置ではなく、物語の展開の中に、新たに配置し直している。原典の和歌を、登場人物たちの気持ちの流れを再構築する文脈の中に組み入れているのである。このように見えてくると、原典の和歌を会話にする場合のみならず、そのままに用いる場合もさまざまな工夫がなされていることがわかる。

三、和歌の取捨選択

では、どのような和歌が原文のまま用いられ、どのような和歌が

会話に置き換えられたのだろうか。両者の和歌は、どのような意図により区別されているのかについて、紫の上の和歌を例にあげて具体的に見てゆきたい。

『源氏物語』に紫の上の和歌は二十三首ある。その内訳は次の通りである。

光源氏との贈答歌……十四首

手習の歌……二首（但し、光源氏が見つけて返歌を書き加え、結果的には贈答歌）

源氏と明石の中宮との三人の唱和……一首

秋好中宮との贈答歌……二首

朱雀院、明石の君、花散里との贈答歌……それぞれ一首

中務との唱和……一首

二十三首中の十七首までが光源氏に関わって詠まれた歌である。

その十七首の贈答歌を見ると、いずれも、物語の重要な局面で詠じられている。

すなわち、光源氏の邸宅に引き取られて間もなくの、手習いの歌として詠まれた歌

①「かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん」（若紫）

祭りの日の見物に出かける前に、手づから若紫の髪削ぎをする源氏との贈答歌

②「千尋ともいかでか知らむさだめなく満ち干る潮ののどけからぬに」（葵）

藤壺の出家を嘆き雲林院に籠もりつつける源氏の心変わりを疑う贈答歌

③「風吹けばまづぞ乱るる色かはる浅茅が露にかかるささがに」（賢木）

須磨退去を決意した光源氏との別れを悲しむ歌

④「別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなくさめてまし」（須磨）

⑤「惜しからぬ命にかへて目の前の別れをしはしとどめてしかな」（須磨）

須磨に退去して暮らす源氏を案じる贈答歌

⑥「浦人のしほくむ袖にくらべ見よ波路へだつる夜の衣を」（須磨）

⑦「浦風やかに吹くらむ思いやる袖うち濡らし波間なきころ」（明石）

明石の君との関係を知らされて嘆く贈答歌

⑧「うらなくも思ひけるかな契りしを松より波は越えじものぞと」（明石）

⑨「思ふどちなびくかたにはあらずともわれぞ煙にさきだちなまし」（濡標）

源氏の明石での絵日記を見ての贈答歌

⑩「ひとりゐて嘆きしよりは海士の住むかたをかくてぞ見るべかりける」（絵合）

明石のもとへゆく源氏を見送る贈答歌

①「舟とむる遠方人のなくはこそ明日帰へりこむ夫と待ち見ぬ」

(薄雲)

源氏からさまざまな女性の噂を聞かされた冬の夜の贈答歌

②「水閉ち石間の水はゆきなやみ空澄む月のかげぞながるる」

(朝顔)

六条院にて新春を迎えての贈答歌

③「くもりなき池の鏡によろづ代をすむべきかけぞしるく見えける」(初音)

(若菜上)

女三宮の降嫁を嘆く手習い歌

④「目に近くうつればかはる世の中を行く末遠く頼みけるかな」

(若菜上)

⑤「身に近く秋や来ぬらん見るままに青葉の山もうつろひにけり」(若菜上)

(若菜上)

二条院に住まいを移し、小康を得た折の贈答歌

⑥「消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮の露のかかるばかりを」(若菜下)

(若菜下)

死の直前、源氏と明石の中宮との唱和

⑦「おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱る萩のうは露」

(露)

紫の上の和歌を辿ってゆくと、源氏と共に暮らした波乱に満ちた生涯の、折々の切実な心情を詠じた歌が多い。

ところが、『新源氏物語』に残された紫の上の和歌はわずか五首である。

光源氏との贈答歌……一首

秋好中宮との贈答歌……二首

手習い歌……二首

しかも、光源氏との贈答歌は一首(前述⑤)に過ぎない。また、手習い歌(前述①、④)を含めても三首である。そして、秋好中宮との春秋争いの贈答歌二首は、原典にある次の二首いずれもが用いられているのである。

⑧「風に散る紅葉はかろし春の色を岩根の松にかけてこそ見ぬ」(少女)

(少女)

⑨「花園の胡蝶をさへや下草に秋まつむしはうとく見るらむ」

(胡蝶)

このように、『新源氏物語』には、紫の上の深刻な悩みや嘆き、そして喜びを詠じた和歌は重視されていない。つまり、紫の上を描くのに原典の和歌を用いることは少なかつたといえる。若菜上巻の女三宮の降嫁に絶望し嘆く手習い歌の⑤、朝顔巻の孤独な心象を詠じた⑥等は、会話化されることもなく、場面ごと削除されている。

紫の上と光源氏の交流はもっぱら会話によって描かれるように『新源氏物語』においては重要な場面の感情表現としての和歌が会話化される傾向が顕著である。

例えば、御法巻の紫の上の最期の和歌も『新源氏物語』では会話化されている。どのような会話に書き直されているかを原典の場面と比べてみよう。

かばかりの暇あるをも、いとうれしと思ひきこえたまへる御けしきを見たまふも、心苦しく、つひにいかにとおぼし騒がむと、あはれなれば、

おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱るる秋のうは露げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるおりさへ忍びがたきを、見出したまひても

ややもせば消えをあらそふ露の世に後れ先だつほど経ずもがな

とて、御涙を払ひたまはず。宮

秋風にしばしとまらぬ露の世をたれか草葉のうへとのみ見むと聞こえかはしたまふ……。

死の直前、余命わずかであることを予感して、紫の上は、吹き荒れる風に抗いがたく消えてゆく萩の露を眺めている。しかし、源氏は紫の上が身を起こしている姿を見て有頂天になり、庭の光景など目にも入らない。そんな源氏を眺めて、紫の上は庭の光景に託して最期の和歌を詠む。源氏は、はじめて紫の上の眼に映る萩に置く露を見やり、紫の上の死期の近いことを悟り涙する。明石中宮もまた紫の上の死期の近いことを嘆く。

この三者の唱和を含む場面を『新源氏物語』「露の世の別れはかなき御法の巻」では次のように描いている。

(ほんの少し気分がよいのをご覧になると、こんなに喜んで下

さるのかわ……もし、わたくしが亡くなったらどんなにお嘆きになるかしら)

と紫の上は思うと、源氏を置いて逝くのがいまさらのように悲しかった。

「でももう、だめですわ。わたくしね、萩の花の露を見ていますの……ほら。風に乱れて散ってゆきますわ。あんなふうにな命の露も」

という、源氏は耐えられなくて、

「死ぬときはもろとも。あなたを先立たせては長くは生きていられないよ」

とせきあへぬ涙があふれてくる。

「お母さま。花の露なんてさびしいたえをおっしゃらないで下さいまし」

中宮は紫の上にすがって泣いていられる。

死の直前に和歌の唱和を行うという形は、現代においては理解し難い行為といえよう。むしろ、夫と養女に囲まれて、このような会話がなされたというほうが、受け入れやすいことは言うまでもない。明石中宮が、はかない露を「草葉のうへとのみ見む」と詠む和歌を「さびしいたえをおっしゃらないで」と意識した台詞は、庭の情景を詠じた和歌に託された真の意味を直截に言い得ている妙訳である。

このような、物語展開上の重要な場面と和歌を、田辺聖子は巧みに散文化して、会話によって描き出すことで現代読者に受け入れら

れやすく再構成しているのである。この例のみならず、紫の上の最期の心境を描く御法巻の多くの和歌は、『新源氏物語』では一首も用いられていないのである。『源氏物語』における主人公の心情に密着した和歌ほど『新源氏物語』では会話に置き換えられ、ていねいに心情が描写される傾向があるといえよう。

一方、秋好中宮との春秋争いの和歌は二首とも用いられている。そのうちの一首が詠じられた少女巻の場面を、『新源氏物語』によって見ておこう。

九月になると紅葉が色づき、秋景色を賞でるにふさわしい中宮の御殿の庭は、まことに美しかった。

中宮は趣向を凝らして、紫の上にお便りをなさる。風の吹く夕、箱の蓋を盆にして、色とりどりの花や紅葉をまぜ、美少女の使者に持たせてよこされた。濃い紫の袖に紫苑の上衣、その上に赤朽葉のうすものの汗衫を着けた美少女が、ものなれた様子で廊や渡殿の反橋を渡ってこちらへくるさまは、絵のようであった。

中宮のお手紙には、

へころから春まつ苑は わか宿の 紅葉を風のつてにだに見よ

(じ)自分のお好みで春がお好きなのでしょう。いまは、秋、お庭にはなんの風情もございませう。せめてこちらの秋景色のみごとなさを風のたよりにごらんくださいまし)

紫の上のほうでは、このお便りがたいそう興ふかく思われた。

さっそく盆に苔を敷いて、岩などあしらい、五葉の松につけた歌

をお返しする。

〈風に散る紅葉はかろし春のいろを岩根の松にかけてこそ見ぬ〉

(紅葉ははかなく風に散りますわ。松の色こそかわらぬ春の緑でございませう)

よく見ると岩も松も精巧なつくり物で、これには中宮も大いにたのしまれた。

六条院に暮らす女性たちの風流に明け暮れる日常が描かれる場面である。この場面に置かれた和歌は、現代語の中にあって違和感よりも、むしろ効果的に機能しているといえよう。ここでは、和歌は、王朝という時代設定に必要な雅な雰囲気醸し出すために必要であったと考えられる。このように、主情的でない雅な社交の和歌は原文のままに引用して、平安時代の雰囲気を表す小道具として効果的に用いられているのである。

ちなみに、原典では、この春秋争いの贈答を、紫の上亡き後に思い出した秋好中宮が、

枯れはつる野辺をうしとや亡き人の秋に心をとどめざりける (御法巻)

という弔問の和歌を光源氏に贈る場面がある。しかし、この和歌は『新源氏物語』では用いられず、次のように散文化される。

亡きかたは春がお好きでいらっしやいましたわね。ものみな枯れ果てる秋の野辺の侘びしさをお厭いになったのでしょうか。

今になってみれば、まことにその通りに思われまして……

という「しみじみとしたお文がとどけられた」のである。原典の和歌は散文の手紙として書かれ、生前の紫の上を追悼する、秋好中宮の真情あふれる和歌は用いられないのである。

五、おわりに

『新源氏物語』において従来の現代語訳の中に原文のままに置かれていた和歌を、会話として散文化したことは画期的な試みであった。しかし、すべての和歌が散文化されたわけではなかった。原典の和歌の四分の一は、会話化、散文化されずにそのままに用いられた。そこには、いかなる意図が働いたのか。本稿では、紫の上関連の和歌を取り上げて考察した。

その結果、紫の上の心情を描く和歌、光源氏との贈答歌はほとんどが会話化されていることがわかった。登場人物たちのあふれる思いは原典にある和歌を用いることなく、あらたに創作した会話で描かれる傾向が顕著であるといえる。また、原典の和歌を引く場合においても、原典通りの位置に置くのではなく、現代小説として再構成する中に、現代語の文脈中に違和感なく置こうという試みがなされている。紫の上と秋好中宮との春秋優劣論を題材に詠み交わした和歌のように、多く平安時代という時代設定に必要な雰囲気を出すための小道具としての役割を担わされているのである。

和歌に負うところが大きい王朝物語を、饒舌な会話によって登場

人物の心情を濃やかに描き出す現代小説に翻案しつつも、原典の和歌を取捨選択し、巧みに取り入れて組み込むことも行われているのである。そのような試みの中にも「国文科出身の女の戯作者として、どうしても一度は挑みたかった『源氏物語』¹⁾と云う田辺聖子の紫式部への「挑戦」の具体相を看取しうるのである。「翻訳史のビッグ・バン」²⁾と位置づけられる『新源氏物語』が、『源氏物語』享受史上に果たした役割と、その影響力については、さらに詳細な原典との比較分析を通じて具体的に究明される必要がある。

【注】

- (1) 『新源氏物語』の本文は『田辺聖子全集』（集英社）所収本文による。以下の引用も同書による。書誌に関しては、浦西和彦著『田辺聖子書誌』（和泉書院、平成七年）および『田辺聖子全集』第八巻所収の解題（集英社）に詳しい。
- (2) 『源氏物語』の本文は石田穰二・清水好子校注『新潮日本古典集成 源氏物語』（新潮社、昭和六一年）による。以下の引用も同書による。
- (3) 小町谷照彦「源氏文化の現在」（『源氏文化の時空』森林社、平成一七年）に詳しい。
- (4) 和辻哲郎『源氏物語』について（『日本精神史研究』岩波書店、昭和一五年）。
- (5) 青柳秋生「源氏物語執筆の順序上」（『国語と国文学』昭和一四年八月）や武田宗俊「源氏物語の最初の形態上・下」（『文

学』昭和二五年六、七月)等。

(6) 田辺聖子「理想を追い求める恋人たち」(『波』岩波書店、平成二年五月号)に「源氏物語の原典はなかなかかむずかしくて馴染みのない人には主人公の顔が見えないのです」とあり、

『源氏研究』七号(翰林書房、平成二四年四月)所収の座談会「源氏物語の華やぎと魅力」において「近代小説と全然違うところは主人公の顔が、ぱっと出てこないところだと思えます。源氏の顔がいつまでたっても出てこない……そういうところに『新源氏』は挑戦したんですね」と発言されている。

(7) 『源氏紙風船』(『田辺聖子全集』集英社)等。

(8) 北村結花『源氏物語』の再生―現代語訳論―(『文学』三卷一号、平成四年一月)。呉羽長『源氏物語の受容―現代作家の場合―』(新典社、平成二〇年)、初出は「田辺聖子の『源氏物語』体験考―『新源氏物語』を中心として―」(『富山大学教育学部紀要』三七号、昭和六四年三月)。呉羽長「日本古典文学の現代語訳―『源氏物語』の場合―」(『表現研究』七四号、平成二四年一〇月)。立石和弘『源氏物語』の現代語訳(『源氏文化の時空』(森林社、平成一七年)。吉井美弥子「田辺聖子と古典作品―いにしへを今に織りなす『新源氏』の論」(『国文学解釈と鑑賞別冊 田辺聖子 戦後文学への新視角』(至文堂、平成一八年七月)。呉羽長「古典作品との関係性―田辺聖子における「もののはれ」の深化について」(『国文学解釈と鑑賞別冊 田辺聖子 戦後文学へ

の新視角』(至文堂、平成一八年七月)。呉羽長「『新源氏物語』から『霧ふかき宇治の恋』へ―田辺聖子と『源氏物語』―」(『田辺聖子全集 第八巻』(集英社、平成一八年)。宮内淳子「『源氏物語』の現代語訳と「女流」の領域―戦後の女性作家による現代語訳をめぐる―」(『源氏物語研究 第六巻 近代文学における源氏物語』(おうふう、平成一九年)。

(9) 「口語訳を考えたときに取り上げた方法なのだが、和歌を会話に引きうつすということをやってみた。物語の中で唱和される歌は、感情の昂揚、増幅の表現と思われるので、それを会話に引きうつすことをやってみた。…むしろその方がスムーズに滑脱に原意を伝えるかもしれない」(注7と同書)

(10) 円地文子『源氏物語』(新潮文庫、平成二〇年)

(11) 「子弟の縁」(『歳月切符』集英社文庫)

(12) 北村結花「夢見る頃を過ぎて―田辺聖子『新源氏物語』論―」(『国際文化研究』一四巻、平成一三年一月)。田辺聖子以降に「原文の絶対性は失われ」「原文離れが加速的に進ん」とされる。

